

Folkie Music by Suzuki Katsu

鈴木 カツ 東京・築地生まれ。アメリカ音楽通として新聞・雑誌・ラジオなどで活躍。ミュージック・ペンクラブ会員、音楽評論家、フリー・デザイナ、編集者などの顔を持つ。主な著書に「ロカビリー・ビート」「ディランズビート」「フォーク・ミュージック(シンコー・ミュージック)」、「カントリー&フォーク決定盤」「フォーク・ブルースな夜(音楽之友社)」編著に「リズム&カントリーロック(シンコー・ミュージック)」「アート・オブ・フォーク」「アメリカ音楽ルーツ・ガイド(音楽之友社)」「アメリカを作った101人(ヤマハ出版)」「グッド・タイム・ミュージック」「アコースティック・スウィング(ヴィヴィッド・ブックス)」などがある。

アメリカン・ミュージックの奥深さを改めて感じたのは、1960年代に起こった空前の大ブーム「アメリカン・フォーク・リヴァイヴァル」だった。それ以前のぼくはロカビリー、カントリー、ジャズにはまっていた。だが、ランプリング・ジャック・エリオット、デイヴ・ヴァン・ロンク、ニュー・ロスト・シティ・ランブラーズその他を知るにつけ、ウディ・ガスリー、ミシシッピ・ジョン・ハート、レッドベリー、ジェシー・フラワー、ロバート・ジョンソン、チャーリー・ブル&ノース・カロライナ・ランブラーズ、その他の魅力的なミュージシャンに出会うこととなった。また1920年代から1940年代までのアメリカ・ルーツ・ミュージックを、黒人・白人音楽を差別なく好編集したハリー・スミスの「アンソロジー・オブ・アメリカン・フォーク・ミュージック(50年代半ば、良心的インディーズと広く知られたフォークウェイズからリリース)からアメリカ音楽の深い水脈を知るところとなった。

フォーク・リヴァイヴァルで脚光を浴びたフォーク・ジャンルをおさらいしておこう。まず「モダン・フォーク」と呼ばれたコーラスの活性化だ。洗練されたハーモニーをフォーク・ミュージックに取り入れたもので、ザ・ウィーヴァーズ、ザ・キングストン・トリオ、P.P.&M、ブラザーズ・フォア、タリアーズなどが脚光を浴びた。次は「オールド・タイム・ストリング・バンド」「ブルーグラス」という南部生まれのカントリーがニューヨークや、シカゴなどと、都市部で流行り始めた。ニュー・ロスト・シティ・ランブラーズ、グリーンブライア・ボーイズ、キース&ルーニーなどが有名。「ジャグ・バンド」という戦前の黒人音楽シーンで人気があったダンス・ミュージックもインテリ層の白人青年たちの間で盛んに演奏された。ジム・クウェスキン・ジャグ・バンド、イヴン・ダズン・ジャグ・バンドなどが有名だ。黒人の「ブルース」「R & B」などに傾倒していった連中も現れた。デイヴ・ヴァン・ロンク、エリック・フォン・シュミット、ジェフ・マルダーなどが、洗いやジャンルにのめり込んでいった。「プロテスト・ソング」というジャンルももてはやされた。ビート・シーガー、デビューまもないボブ・ディラン、フィル・オクス、トム・パクストンなどが代表格だろう。

フォーク・ブームが少し下り坂になり始めた

60年代終盤から70年代前半にかけて「フォーク・ロック」という新しい概念のフォーク・ミュージックが誕生した。ご存知新生ボブ・ディラン、ザ・パーズ、ママス&パパスなどがヒーローとなった。アメリカ音楽の本流、ナッシュヴィル&ベイカーズフィールド・カントリーに接近するミュージシャンも現れ始めた。カントリー・ロックの台頭だ。フライング・プリトウ・ブラザーズ、グラム・パーソンズ、エミルウ・ハリスなどがスターの座を勝ち取った。ウディ・ガスリーの流れを汲むうた作りに邁進するミュージシャンも現れた。私的な内容をうたうようになり、ポップス、ロックなどとのブレンドを試み、次々と成功を収めていった。そして「シンガー・ソングライター」と呼ばれたジャンルが生まれた。ティム・ハーディン、ジャクソン・ブラウン、ジェイムズ・テイラーなどが広く知られている。

こうした背景から良く分かるとおり、60年代に沸き起こったフォーク・リヴァイヴァルは、アメリカン・ミュージックの良質な部分をポップスに反映させ、強いてはロック・ビジネスに貢献した。ルーツ・ミュージックをフレキシブルに捉える若者も70年代に活躍した。「グッド・タイム・ミュージック」と呼ばれ、戦前栄えたジャグ・バンド、ウェスタン・スウィング、スウィング・ジャズ、ポップスなどをお手本に独自の音楽を確立した。このジャンルの先駆者は、60年代スター、ジョン・セバスチャン率いるラヴィン・スプーンフルと言ってもよいだろう。ノスタルジック・サウンドを醸し出すヒップなバンド、ダン・ヒックス&ヒズ・ホット・リックスもその良き代表例だ。ニューヨークのリヴァイヴァル・ブルーグラスからジャズに接近したジョン・ミラー、ルウ・ロンドン、セントラル・パーク・サークスなどの見事なアコースティック・スウィングも、フォーク・リヴァイヴァルを体験したからこそ生まれた、といっても良い。コロラドのフォーク&ブルーグラス・サーキットから誕生したザ・オフエリア・スウィング・バンドもその例に漏れない。こうしたスウィングなフォーク・ジャズは、今日アコースティック・スウィング」と命名され、DJ周辺の若い音楽ファンに静かなブームを呼んでいるようだ。

「フォーク・ミュージック」は、このように60年代フォーク・リヴァイヴァルを体験した音

楽家たちが、アメリカン・ポップス、ロックという巨大ビジネスに押し倒されることなく、個性豊かなサウンドを確立して行った歴史そのもの、といえそう。フォーク・リヴァイヴァルの重要な発信地は、「コービー・ハウス」と呼ばれたリヴァイヴァルが群生した<ニューヨーク・グリニッチ・ヴィレッジ>周辺が良く知られているが、リヴァイヴァルが盛んになるにつれて全米各地に散らばっていった。ザ・キングストン・トリオを生み出したロスアンジェルスも、新しいフォーク・サウンドを発信、やがてその波はサンフランシスコにも及んだ。ニューヨークから少し離れたアート・ヴィレッジ、<ウッドストック>は、ハッピー&アーティヤビリー・フェアといったフォーク・スターが早くから住み着き、フォークを下地にニュー・オーリンズ、ナッシュヴィルで栄えた音楽をブレンドして新しいロックを誕生させた。ディラン、ザ・バンド、マッド・エイカーズ、ポピー・チャールズなどの活躍が目立った。その原動力となったのが、ディランのマネージャー、アルバート・グロスマンが設立したベアズヴィル・サウンド・スタジオだった。

<ナッシュヴィル>は、一般にフォーク・リヴァイヴァルにほど遠い所と言われているが、フォーク・リヴァイヴァルの大きな波は確実に押し寄せていた。ナッシュヴィル・アンダーグラウンドは、

まさにフォーク歌手の溜まり場だった。ミッキー・ニューベリー、ジョン・ハートフォードという逸材を輩出した。このふたりはあまり語られることが少ないが、ナッシュヴィルのボブ・ディランと騒がれたことがあった。フォーク・サウンドとの接点は、プロの中のプロと呼ばれたスタジオ・ミュージシャンに求めることが出来る。彼らの優秀さを風の便りに、ナッシュヴィルに赴くフォーク・ミュージシャンが後を絶たなかった。先人は、ジョン・パエズ、そしてイアン&シルヴィア。ボブ・ディランは後塵を拝した。ザ・パーズの面々もその例に漏れなかった。

70年代の黄金期を迎えたアメリカン・ロック。が、よく考察してみればその牽引者はつねにボブ・ディランだった。つまりロックが栄えたのはエルヴィス、ザ・ビートルズのお陰といわれているが、ことアメリカン・ロックに関してはディランが放った新しいフォーク・サウンドと捉えることが出来る斬新なロックと、それにともなったディランのスター性だといえそう。ボブ・ディランはいまでもハリー・スミスが編んだ「アンソロジー・オブ・アメリカン・フォーク・ミュージック」に触発されることが多いと語ったことがあった。結論を出せば「フォーク」の歴史は、いまでもディランの活躍に従っているといえそう。

FOLKIE MUSIC best 3



AMCY-2693

Fred Neill
& B. Becker & Macdougall

グリニッチ・ヴィレッジ・フォーク・シーンのカリスマとして名を馳せたフレッド。ブルース、R&Bなどを巧みに紡いだアシッド・フォークが看板だった。若き日のボブ・ディラン、カレン・ダルトンなどが惚れたことでも有名。見方を少し変えれば、本盤はホワイト・ソウルだ。ジョン・セバスチャンも録音参加。



KCP-2387

Jim Kweskin And
The Jug Band
See Reverse Side
For Title

リヴァイヴァル・ジャグ・バンドの最高峰を歩んだジム・クウェスキン・バンド。一般にはヴァンガードのデビュー盤が有名。だが、リブリーズ盤と本盤はマリア・マルダーの妖艶なヴォーカルが味わえる。まさにフォークの傑作。「リッチランド・ウーマン」「ヴァイオラ・リー・ブルース」は、ディランも絶賛だとか。



WPCR-10307

John Fahey
After The Ball

近年、音響派もしくはカラー・ジュ手法の名手と高い評価を受けているジョン・フェイヒだが、彼も紛れもなくフォーク・リヴァイヴァルの洗礼を受けたミュージシャン。70年代前半に発売された本盤は、ノスタルジックなサウンドが心地良く、ウクレレまで聴かせてアコースティック・スウィングの先駆盤と言えそう。